

あの日から 未来へ ～市民インタビュー～

東日本大震災から今年で10年。

あの日から10年の月日を経て感じたそれぞれの想いと、
未来への教訓、防災に向けた備え等についてお話していただきました。



あの日から未来へ
～市民インタビュー～

横山 珠李
Juri Yokoyama

郡山女子大学短期大学部
地域創成学科1年

Profile

南相馬市原町区出身。小学校3年生の時に被災。実家は福島第一原子力発電所から20km圏内にあり、避難所、仮設住宅で暮らす日々の中で地域貢献を志すようになる。2020年4月郡山女子大学短期大学部へ入学。現在は郡山市内で学生生活を送る。

助かったはずの生命。
繰り返させたくない苦悩。
伝えることで、未来の教訓に。

生死を分ける瞬間で、最優先すべきこと。

私は今、短大で地域貢献を学んでいます。震災から10年が経ちますが、新型コロナウイルス感染症等、未来が予測できない今こそ、あの日に学ぶことがあると思います。

ひとつめは、生死を分ける瞬間では自分の生命を最優先することです。私は福島第一原子力発電所から20km圏内の南相馬市原町区出身で小学校3年生の時に被災。強い揺れのあと、避難した校庭から黒い津波を見て、「自分、死ぬのかな」と思いました。祖父と兄に山へ連れられて私は救われましたが、生命を落とした方もたくさんいました。誰かのために引き返した人も多かったのです。助かるはずの生命でした。身の危険にさらされた時は、周囲を顧みず、自分が生き残ること。それが亡くなった方々の想いに応えることになると思います。

身の安全を確保できた時に、大切なこと。

もうひとつは、身の安全を確保できた時の行動です。どうか周囲を思いやってください。私は原発事故で実家へ帰れなくなり、底冷えする避難所でアルミシートに家族と身を寄せ合って過ごしました。お風呂に入れず、冷たいごはんを味噌汁でかき込むような日々。大人の会話は知らない言葉ばかりで気持ちはぐじゃぐじゃでした。祖父は米農家でしたが、震災で農業ができなくなり、悲しい顔をしていました。農業高校に進学したのも、そんな祖父への想いがあったからです。地元の街でも以前は感じられたお互いに助け合う絆が薄れていました。コロナ禍の今、郡山市にいて似た空気を覚えることがあります。みんなが気を配り合うことが必要だと思います。

震災の記憶を伝えることで、誰かを救う教訓に。

私は祖父と故郷の街をもっと元気にしたくて地域貢献を学んでいます。7月からの対面授業で、郡山市で地域のために活動する人たちと話す機会があり、先入観を持たず、地域の課題と向き合う姿勢を学びました。年月が経つほど、震災を知らない世代が増え、風化は進むかもしれません。それも地域課題のひとつと言えます。私は、まず名前からでも震災を知ってほしいです。耳を傾けてくれるなら経験を伝えていきたい。あの日、助かったはずの生命に応えるために。自分と同じつらさを味わう人を少しでも減らせるように。





荒川 美里
Misato Arakawa

郡山市役所
総務部防災危機管理課
消防係

Profile
郡山市出身。大学2年生を終えた春休みに東日本大震災を経験。地方行政への想いを強くし、2013年郡山市役所へ入庁。国民健康保険課に3年在籍後、観光課に4年所属し、全国へ郡山市の魅力と元気を発信。2020年4月から現職。

震災後の応援を胸に
私たちの世代が
地域社会に貢献する番

大好きな郡山をもっと元気な街にしたい。

大学2年生を終えた春休みに実家の居間で東日本大震災を経験しました。体験したことのない強く長い揺れに、祖母を押しのかけて掘りごたつに潜ったことを今でも家族に笑われます。当時住んでいた地域は地盤が硬いのか比較的被害は小さかったのですが、報道で事の大きさを知りました。震災後、大学のゼミで「地方行政で何ができるか」を学び、地方の観光行政に興味を持ち、交通の利便性が良いこの地元を經由地ではなく目的地にしたい、もっと経済が回る元気な街にしたいと思い、郡山市役所に入庁しました。



「応援しているよ！」全国の支援の声を肌で感じた。

2016年に観光課に配属されると、ほぼ毎月のように、震災からの復興を応援してくれる首都圏や姉妹都市の街に出向き、観光物産PRを行って来ました。震災から5年経過してもなお「福島県頑張ってるね!」と温かい声をいただき、その数に驚いたものです。福島県を応援していただいている声や気持ちを肌で強く感じました。物産展で本市産品をご購入いただいた方が観光パンフレットを手に取り「ここ行ったよ!また行こうかな」と話してくださった時は、観光課職員として嬉しかったですね。



小さなことでもできることはある。

震災から10年。郡山市の復興は着実に進み、街中で爪痕を見る機会は減りました。しかし一昨年の東日本台風、さらにはコロナ禍…。私たちが暮らす社会はこの10年ですごいスピードで変化しています。私も部署を異動し業務内容も変わりましたが、震災後の福島への応援に対する感謝の思いは不変で、この社会に何が返せるだろうかと考えています。また、私は高校時代に郡山市から篤志奨学金を受けていて、自分に直接関係のない方の支援で勉強させていただいたため、これからは自分が、私たちの世代が、地域社会の役に立たなくてはならないと強く感じています。いきなり大きなことは出来ませんので、自分の周りを見渡して、少しばかり高くアンテナを張って、小さくても自分に出来ることに気付けるよう心がけています。身近で小さなことでもそれを積み重ねることで、ひいては地域社会の役に立てるかもしれない、応援してくれた方々に返せる何かになるかもしれない。そう信じて、これからも日々業務に励みたいと思います。



佐藤 俊幸
Toshiyuki Sato

郡山地方広域消防組合
田村消防署副当直長
消防司令

Profile
郡山市出身。レスキュー隊のオレンジ服を着て人を助ける姿に憧れ、郡山地方広域消防組合に就職。郡山消防署、喜久田基幹分署等に配属後、福島県の消防防災航空隊に隊長として派遣され、ヘリコプターでの救助活動を3年間で100件以上実施。現在は田村消防署に勤務する。

災害の現場では無力でも、過去を知って備えることで、被害は減らすことができる。

人を助けるために、自分を磨く日々。

私が所属する郡山地方広域消防組合は、郡山市、田村市、三春町、小野町を管轄し、約400人の職員が消防行政を担っています。私は30年以上勤務し、震災時には郡山消防署に所属。火災の消火活動をしたり、1階が傾いた商業施設や押しつぶされた市役所の展望台での救助活動等を行ったりしました。また、3年間は福島県の消防防災航空隊に派遣され、防災ヘリコプターに搭乗して都道府県を越えて救助活動を行う経験もしました。大規模な水害によって水没した街で、タオルを振って、火を焚いて、助けを求める人たちの姿は今も忘れることができません。私たちの任務は、助けを求めている人のもとへ行くこと。体を鍛え、技術を磨き、知識を蓄えるだけでなく、助けを求めている人が少しでも安心できるよう自分を高める努力を日々重ねています。



自然の脅威に対して、人間の力には限界がある。

これまでの経験から感じることは、自然の脅威には、どれだけ鍛錬しても人の力は及ばないところがあるということです。100年に1度と言われる災害が多発する今、絶対安全な場所はどこにもありません。災害が発生すれば消防隊員は現場にかけつけます。でも、大きな災害では、すべての人のもとへすぐに行くことは難しいのです。目の前の助けを求める人に専念する必要があります。また現場にたどり着いても、雨の量を減らすことや川の流れを止めることはできません。どんなに私たちが訓練を重ねても、自然の脅威には、人間は無力なのです。



過去の経験から、備えることで減災を。

でも、それは災害発生時の現場の話です。東日本大震災や東日本台風等、近年の災害の経験を通じて、どこでどのような災害が起きるかという傾向は少しずつわかってきました。どのような所が危険だったのか、どんな被害にあったのかを、経験した人は振り返り周知し、知らない人は学んでください。郡山市ではハザードマップを作成して配布しています。ぜひ確認して、家族で被害を小さくする方法を話し合ってください。自分の生命は自分で守る。そのために、身の周りの危険を知り、災害に備える準備を今すぐ始めてください。



仁井田 真樹

Maki Niida

仁井田本家
女将 発酵食品部

Profile

郡山市出身。父が会津地方出身で酒蔵が身近な家庭で育つ。仁井田本家18代蔵元の仁井田穂彦さんと結婚し、女将として蔵を切り盛りしながら、震災後は発酵食品部の責任者としてスイーツ等を開発。2児の母でもある。

先代の想いを継ぎ、
よりよい環境を
次の世代へつなぐ。

子を守り、社員を思いやる。

震災発生時、私は自宅で2歳の長女を昼寝させていました。お腹の中には二人目がいたのです。突然激しい揺れが起きて、家がつぶれるんじゃないかと思い、本当はダメなのでしょうけれど、子どもを抱えて階段を駆け降り、道端で収まるのを待ちました。身支度して車に乗り会社へ行くと、酒造りの要である蔵の壁の一部が崩れていて。スタッフとご家族の安否が一番だと思い、余震も続く中、最低限の作業をみんなで済ませ、早く帰宅してもらったのを鮮明に憶えています。



原発事故が発生。離れていくお客様。

社員や家族は幸いにも無事でしたが、蔵の経営には大きな影を落とします。仁井田本家の日本酒の特徴は「自然酒」。自然栽培米と天然水、蔵に住む菌だけでつくるお酒で、先代の17代が誕生させて以来、50年以上続いていました。その源は郡山市田村町の自然に囲まれた田んぼ。農業も化学肥料も使わず、自分たちで手間暇かけて栽培したお米で日本酒をつくります。お酒の品質の追求だけでなく、米の消費量が減る中、後世に元気な田んぼを伝える取り組みでもあります。それが原発事故で一変。風と地形の影響で私たちの田んぼへの影響はなかったのですが、以前からの健康意識が高いお客様は一目散に離れていきました。



先代の想いを受け止め、未来を見据えて、今を変える。

でも、仁井田本家は田村町で300年以上続く蔵です。今18代ですから、17人が想像もつかないような困難を乗り越えて今日があるはず。「俺は選ばれてここにいる」。そんな蔵元の想いに寄り添い、お米の収穫体験や酒蔵見学、発酵技術を生かしたノンアルコールの発酵食品の開発等、新たな取り組みを重ねました。それらが評判となり、少しずつ健康志向の方もどってきています。さらに、16代が裏山に植えた杉が育ち、今年はそれを材料に自分たちで手づくりした木桶でお酒をつくる予定です。今だけがよければいいのではなく、次の世代も考えて行動していく。それはお酒づくりだけではなく、街づくりにも言えることです。震災を経て、多くの出会いがあり、蔵は大きく変わりました。郡山市田村町と言えば、仁井田本家だと思ってもらえるように、過去に学び、未来を想い、今動いていきます。



すえ まさのり

陶 正徳

Masanori Sue

大堀相馬焼 陶徳窯
10代目窯元

Profile

双葉郡浪江町出身。福島第一原子力発電所から10km圏内に位置する大堀地区で、大堀相馬焼の窯元に生まれる。高校卒業後、専門学校で学び25歳から実家の窯元で活動。東日本大震災で帰還困難区域となり、郡山市の仮設工房で陶芸を再開。

故郷への募る想いと、
仕事への誇りを胸に、
陶芸の道を歩む。

工房で被災し、着のみ着のまま避難者を支援。

私は江戸初期から300年以上続く大堀相馬焼の窯元に生まれました。学生の頃は正直あまり関心を持てなかったのですが、何となく自分もこの道に進むのだろうと思っていました。高校卒業後、陶芸の専門学校へ通い、25歳から実家の窯で器を製作。震災が発生したのは工房で作業をしていた時です。強く長い揺れで、作品はすべて棚から落ちて割れましたが、身を守るだけで精一杯でした。津波の影響はなく、消防団に入っていたので、3月11日は大渋滞の道で避難誘導を行いました。自分も避難者も着の身着のまま。すぐに帰れると思っていましたから。



響き渡る爆発音。防護服姿の役場職員に危機を知る。

状況が変わったのは、3月12日の16時頃です。突然爆発音が聞こえて、山の方に煙が見えました。少し経つと、防護服で身を包んだ役場の人が現れ「ここも危険なので、20km先へ避難してください」と言うんです。理由を半ば強引に聞き出すと「原発が爆発したらしい」。慌てましたね。ここにいたら死ぬんじゃないかと思い、親戚がいる郡山市へ避難しました。ただ、私は爆発音をこの耳で聞いていたので、もっと速くへ行きたかった。姉のいる埼玉県へ避難して、しばらく暮らしました。避難は早ければ早いほど、混雑を避けて安全に移動できます。ガソリンは日頃からこまめに給油しておくことを改めて忘れないでください。

募る故郷への想い。一生の仕事として陶芸と向き合う。

その後、両親は友人が多い福島県に帰ることを望んでいました。そこで、現在の土地と住居を2015年に購入し2016年に工房が整うと私も移りました。ただ、それから苦労の連続で2019年の台風19号では70cmの床上浸水で機材等を失い、コロナ禍で陶器の需要はさらに減っています。これまでの決断が正しいのか、私にはまだ分かりません。だから、教訓なんてとても語れないです。ただ、離れれば離れるほど、故郷の浪江町の海が見たくなり、何となく継いだはずの陶芸が一生の仕事だと感じられるようになりました。先のことは分かりません。でも、もし帰れるなら、またあの街で代々受け継いできた大堀相馬焼をつくっていきたい。そのためには今はお客様の生活を少しでも豊かにすることを願って、心を込めて目の前の器をつくっています。

